The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	主旨説明
Author(s)	田中, 仁
Citation	OUFCブックレット. 2014, 5, p. 4-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50106
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

主旨説明（田中仁）

田中です。まずワークショップのプログラムをご覧ください。「20 世紀中国政治史像の再構築―学際的・史料学的探求と対話の試み」をテーマとし，NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点の政治史資料研究班の主催で，大阪大学政治史研究会と「21 世紀課題群と中国」大阪大学未来研究イニシアティブが共催するというかたちで開催いたします。

主旨をハンドアウトにまとめましたが，それをもとにすこしお話させていただきます。

NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点の政治史資料研究班は，金子肇，松重充浩，土田哲夫，吉田豊子，水羽信男，私の 6 人で編成しています。校務の関係で欠席の日本大学文理学部の松重さん以外の 5 人が出席しています。この研究班の課題を，次のように設定しています。考察対象を「短い 20 世紀」，1920 年代から 1980 年代の中国とし，そして global, regional, national, local，grassroots の 5 つの位相を設定して課題の具体化を図っていく。また，ここでの「政治史」には「外交史」と「政治思想史」を含むものとして「政治史」を構想しています。この時期の中国政治は，ロシア革命からソ連解体にいたる 20 世紀社会主義政治の一環を構成するとともに，両大戦間期から第二次大戦を経て冷戦期にいたる国際政治の枠組みのなかで，「蒋介石の 20 年」と「毛沢東の 30 年」がどのような内実を獲得したのかということを検討したいと考えました。ハンドアウトに図を掲げましたが，「蒋介石の 20 年」の前段階としてのロシア革命から 1920 年代，「毛沢東の 30 年」後の移行期としての 1980 年代までを考察の対象としたいと考えています。

この課題設定に関わる 3 つの論点ですが，冷戦後東アジア地域秩序の再構築は，冷戦秩序から多国間主義の秩序への転換を背景にして中国における国民統合の論理が社会主義イデオロギーから「中華民族の偉大な復興」への転換や，或いは台湾における競合的政党政治の確立，さらには日本における五五年体制解体から連立政権の模索を伴った時期でありました。こうした環境のもとで，(1)21 世紀中国のグローバル大国化に関わる社会科学領域や政

策科学および世界システム論での新たな論点の提示，(2)東アジアのアーカイヴズ環境が，日本・台湾・韓国のみならず中国をふくむ東アジア地域社会の質的変容をもたらしつつあること，(3)今日の中国でネット社会化とデジタル資料の蓄積と公開が急速に進み，その結果，国家・社会関係の変容をもたらしていることに注目したとき，「転換期」の日中関係における課題解決のための処方の検討と吟味にあたって，「20 世紀中国政治史像」の再構築・刷新が，極めて重要な課題であると考えます。

この課題設定には，以下の 3 つの論点を含んでいます。

第一に，「20 世紀中国政治史像」の再構築にあたって，中国の 1980 年代が極めて重要な意味を有していることです。1980 年の中共中央党史研究室・文献研究室設立から，87 年の中華人民共和国档案法にいたる過程を，「ポスト毛沢東」の時代が改革開放に転じる中国における制度としての中共党史研究の確立過程と捉えることができるように思われます。すなわち文革後の政治社会秩序再建の一部として，二つの中共党史研究機関の設立がありましたし，さらに档案法の制定は，結党以来の中共関係文書を一方で他の歴史文書と同一の範疇に組み入れるとともに，他方で，中共関係文書をふくむ現用文書と歴史文書の区別に関わる規範の法制化を意味していたからです。同時に，中国の 1980 年代は，中共党史研究が中共の政治宣伝の一環をなす領域と歴史学の一部としてのそれとに次第に分離していく時期でもありました。

第二に，日本の 20 世紀中国政治史研究において，人文学と社会科学とをどのように架橋するのかという課題が存在しています。例えば 1949 年前後の中国を論じた［久保編 2006］は人文学系政治史のフロンティアを 1950 年代に設定しています。また慶應大学出版会が前後して公刊した二つの論著［高橋編 2010，山本編 2011］は，文学部と法学部という日本の教育制度とそこでの政治史にかかわるアプローチ・方法の相違を対照的に提示することになりました。別の例をあげると，文化大革命研究の未着手という人文学の見方と，それはすでに「一つの山を越えたのかもしれない」という社会科学からの見解との間のすり合わせと検討が必要です。さらに歴史学と諸学との対話について，私達大阪大学中国文化フォーラムの共同研究［田中・三好編

2012］は，地域研究の立ち位置から方法やパラダイムの問題を提起しました。

第三に，史料（資料）論として「20 世紀中国政治史像」の刷新を構想することが求められています。すなわち，グローバリゼーションの一部をなす情報革命と社会のネット化とそのもとでの東アジアのアーカイヴズ環境について吟味する必要があるということです。

以上が今回のワークショップの趣旨説明ですが，さらに敷衍的な話をさせていただきます。このワークショップを共催することになった「21 世紀課題群と中国」という研究グループについてです。これは今年度大阪大学の学内公募として採択された研究企画（未来研究イニシアティブ・グループ支援事業）で，大阪大学の研究面での強化を図る具体的な提案を求められています。全部で 11 のプロジェクトが採択されましたが，「21 世紀課題群と中国」は大阪大学中国文化フォーラムが提出した企画です。昨日事業報告会があり，お手許にあるのはそこで配布したハンドアウトです。私たちは，「企画のアイディア」として，a.東アジア言語空間，b. 21 世紀課題群，c.歴史学の刷新の三つの範疇の総合という論点を提出しました。すなわち，a.東アジアの漢語・中国語を第一言語とする世界，さらにもう少し拡大して日本語やモンゴル語，ハングルをふくめたイメージでもよいのですが，そのような言語空間における知的営為が存在すること，つぎに b. 21 世紀に入ってそれまでとは異なるさまざまな課題，たとえば非対称戦争とテロリズム，新型伝染病と衛生問題等々を視野におさめること，そして c.これらの課題を束ねるところに歴史学の刷新を位置づけたい，換言すると，社会科学における歴史学と人文学としての歴史学との対話を深めるなかで「東アジア言語空間」と「21 世紀課題群」との総合を試みるということです。

ワークショップのもうひとつの共催団体である大阪大学政治史研究会では，法学研究科の同僚である瀧口剛先生を中心に教員と大学院生による研究セミナーを定期的に開催しています。

本日のワークショップでは，西村成雄先生の『20 世紀中国政治史研究』と，浅野・川井先生編の『概説近現代中国政治史』を素材に 20 世紀中国政

治史像の再構築に関わる視角と方法, およびそれを担保する史資料の意味を考えたいと思います。第一部では，両著の著者・編者である西村，浅野，川井三先生に，著者が語る両著が描く 20 世紀中国政治史の視角と方法，政治史の叙述と研究に関わる史資料の意味についてお話しいただき, さらに瀧口, 金子両先生に両著を読み解きながら考えたことを提示していただきます。第二部では，第一部の報告を受けて討論を行うことにいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

水羽：ありがとうございます。では第 1 報告，西村先生からお願いしたいと思いますが，一応，20 分間という短い時間になっておりますので，ご協力の方を宜しくお願い致します。